

## 【8】千年前の江戸川

今から丁度千年前の平安時代中期、紀元 1020 年 12 月 2 日（旧暦）というとな何の日だったでしょう。

今の千葉県の一部である上総（かずさ）の国の、「介」（すけ；現今の副知事に相等、知事は「守」）に任じられていた貴族の菅原孝標（すがわらたかすえ）が 3 年間の任期を終え、娘を含む家族や従者ともども今の市原市にあった国府から 3 ヶ月の大旅行の末に京都の自邸に着いた日です。

この時、菅原孝標の娘は 13 歳の少女だったのですが、長じてこの旅行の思い出をはじめ、回顧録風にまとめたのが、高校の古文の定番の「更級日記」です。

東京湾に沿って武蔵国から東海道に入り、京都までの約 600km の旅で、途中、たびたび大河を渡りますが、今の東京と千葉の境界を流れて東京湾に流入する江戸川のことが、当時の呼び名「太日川」（ふといがわ）で登場し、渡し場のある左岸側「まつさと」（今の千葉県松戸市）の地で一泊しています。

荷物を運ぶ渡し舟が一晩中動いていたとありますから、都への貢物やみやげ物で荷物も多かったことでしょうし、男は馬、女子供は平安風の車（牛車か人力か不明）で移動し、従者もいたので、江戸期の大名行列とまで言わずとも大掛かりな旅だったようです。

松戸というと、明治新政府は外国人技術者による助けの下に近代的な治水事業にのり出しますが、明治 8 年の内務省設置後、関東地方で最初の河川工事が江戸川の松戸地先の水制の設置ですので、治水の歴史上からも見落とせない地名です。

近畿圏と異なり関東には古い時代の記録が乏しいので、更級日記の記述のおかげで、千年の歳月を経て太日川変じて江戸川の変わらぬ流れに想いをいたすことができます。

現役時代、松戸の官舎に住んでいた私にとっても JR 常磐線の江戸川橋梁を渡るたびに、手段は変わっても川を渡るということに何かロマンを感じるのです。